

[原著論文]

## メルヒオール・ファン・サントフォールト ——日本で生きることを選んだリーフデ号船員の生涯——

森 良和

### 要 約

メルヒオール・ファン・サントフォールトは、1600年に豊後に到着したオランダ船リーフデ号の船員の一人である。彼はウィリアム・アダムズのように旗本扱いとはならなかったが、平戸のオランダ・イギリス両商館とも取引し、自由市民として独自に商売を営んだ。リーフデ号の船員のなかで最も長生きした彼は、およそ40年間で日本で過ごしたが、幕府の鎖国政策によってバタヴィアに追放され、その地で死去した。リーフデ号の船員はだれ一人母国に帰還せず、ほとんどは自らの意思で日本にとどまった。本稿では従来扱われることのなかったサントフォールトの生涯を明らかにし、当時世界に雄飛したオランダ人船員の生き方の一例を考察する。

キーワード：リーフデ号、江戸初期、日蘭交渉、オランダ商館

### 1 はじめに

本稿の目的は、かつてオランダ船リーフデ号で日本に来航した船員のなかで最も長生きしたメルヒオール・ファン・サントフォールト Melchior van Santvoort (以下「サントフォールト」)の生涯を明らかにすることである。リーフデ号自体はよく知られているが、その船員たちのその後については、ウィリアム・アダムズとヤン・ヨーステンを除いてほとんど知られていないし、この両者以外についてまとめた先行研究も寡聞にして把握していない。そこで本稿ではサントフォールトを例に、リーフデ号の生き残り船員と江戸初期の日本社会との関わり方を考察していく。初めにリーフデ号の日本到着までの経緯を大まかに述べておく。

1600年4月19日(ユリウス暦、以下同じ)、豊後国佐志生付近に大型の異国船が出現した。オランダ船リーフデ号である。この船はロッテルダムを1598年6月に出港した後、大西洋を南下して難所マゼラン海峡を通過、さらに苦難の末太平洋を横断し、2年近くかけて日本に辿り着いた。出発時の乗組員は110名、元々司令官ジャックス・マフー Jacques Mahu 率いる5隻編成の船隊として出帆したが、マゼラン海峡通過時に各船は離ればなれになってしまった。1

隻はオランダに戻ったが、何とか同海峡を通過した4隻のうちチリ南部沖で再会できたのはリーフデ号と旗艦ホープ号だけで、この2隻の幹部は今後の針路を協議し、目的地を日本とすることを決めて一路太平洋を並走した。しかしホープ号は太平洋上の北緯28度付近で巻き込まれた激しい嵐によって消息不明になった<sup>1)</sup>。

危うく海の藻屑となるのを免れたリーフデ号にも艱難辛苦が続いた。長期にわたる航海の途上、伝染病や炎暑、飢餓、スペイン人やアメリカ先住民との戦闘、マゼラン海峡付近の酷寒、壊血病などにより乗組員の多数が犠牲となり、豊後に辿り着いたとき生存者は24人に減っていた。翌日にはさらに3人が死亡し、別の3人もまもなく亡くなったので、日本で生活を始めたのは18人となった<sup>2)</sup>。しかしいくつかの証言から、到着した年にさらに4人が死亡したとみられる<sup>3)</sup>。それでも生き残った14人は到着から5年後の1605年にも依然日本で暮らしていたことがわかっている<sup>4)</sup>。

その5年の間に日本でもオランダでも大きな情勢の変化があった。日本ではリーフデ号到着の半年後に起こった関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利を収めると、3年後には家康が征夷大將軍に就任して江戸幕府が開かれ、1605年にはその家康が將軍位を息子の秀忠に譲り、自らは大御所として駿府で政治を執り行うようになっていた。一方、オランダでは1590年代後半から盛んに東インドへの遠征隊が派遣され、マフー船隊もその一つであったが、無秩序な東洋遠征によって香辛料などのアジア物産がもたらされた結果、物価の乱高下を招き、これを防ぐため1602年には六支社から成る連合東インド会社が設立された。翌年には早くもパタニ（マレー半島中部）に同会社の支所が設けられている。同胞が比較的近くまでやって来ているとの情報はまもなくリーフデ号の船員たちに伝わり、彼らに大きな希望を与えた。

では生き残り船員たちはその後どうなったのであろうか。現在高校の「日本史B」の教科書は11種類あり、これらのほとんどに「リーフデ号」、「ウィリアム・アダムズ William Adams」（三浦按針、以下「アダムズ」）、「ヤン・ヨーステン Jan Joosten van Lodenstijn」（耶揚子、以下「ヨーステン」）の名が登場する。しかし他の船員たちが取り上げられることはないし、一般書でも誤解に基づいた記述が少なくない。例えば「アダムズとクワケルナック Jacob Quaeckernaek（リーフデ号船長）、そしてもう一人の仲間（ヨーステン）を除けば、その後（リーフデ号船員のうち）だれ一人として痕跡を残したものはいない<sup>5)</sup>」とか、「リーフデ号の船員はほとんどが本国に帰国した<sup>6)</sup>」としているものがあるが、これらは明らかに誤りである。

アダムズとヨーステンが家康から江戸の居宅のほか地方にも知行地を与えられ、旗本扱いで重用されたことはよく知られている<sup>7)</sup>。二人は何度か朱印状の交付を受けて東南アジア各地に渡り、貿易に励んでいる。また、ヤコブ・クワケルナックは同船の生き残り船員のなかで初めて日本出国を認められ、1605年に平戸藩主松浦鎮信（法印）に提供されたジャンク船で出帆したが<sup>8)</sup>、翌年マラッカ近郊で行われたポルトガル人との戦いで戦死した<sup>9)</sup>。アダムズについての史料は確かに少なくなく、日本語の著作に限っても研究書や伝記、小説の類まで含めるとかなり存在するが、ヨーステンやクワケルナックを単独で扱った書は見当たらない。

一方、それ以外の船員のその後については、従来ほとんど一般に知られることがなかったが、断片的史料を含めれば多くの者たちの生きた証しを垣間見ることができる<sup>10)</sup>。実はリーフデ号の船員たちの大半は自らの意思で日本に残る選択をし、日本社会に溶け込んでいったため、だれ一人帰国することはなかった。より正確には、帰国を示唆する史料は見つかっていない。その彼らのなかでも最も長生きをし、鎖国政策によって出国を余儀なくされるまでの40年近くを日本で過ごして、地道に貿易活動に勤しんだのがサントフォールトである。サントフォールトはアダムズやヨーステンのように旗本扱いとなったわけではなく、特別に華々しい成果を挙げたわけでもない。しかし、一時期オランダ・イギリスの両商館とも密接に関わり、日本と東南アジアを何度も往復して交易を行ったので、江戸初期外交のオランダ人生き証人とと言える。

## 2 オランダ商館の設立まで

リーフデ号乗船以前のサントフォールトの前歴はわからないが、後述のように1570年ころの生まれとみなされ、日本に来航したときはおよそ30歳、リーフデ号では書記を務めていた<sup>11)</sup>。アムステルダム西方、ハーレム近郊の北海沿岸にザントフォールト Zandvoort（「砂の浅瀬」の意）という町があるが、「サントフォールト」という名の由来に関係あるのか。

サントフォールトは日本到着直後にアダムズに付き添った可能性が高い。リーフデ号が豊後に到着したのち、アダムズは堺を経て大坂に移送され、投獄されて「皇帝」（徳川家康、以下同じ）の尋問を受けた。ただ、ひどい扱いは受けなかったようで、アダムズは後年の手紙で「われわれの船員の一人が私の世話をするため一緒に来た」と回想している<sup>12)</sup>。この船員の名前は挙げられていないが、一部のアダムズ研究家がこれをサントフォールトと推定しているのは不自然ではない<sup>13)</sup>。おそらくサントフォールトは多くの船員が日本到着時に瀕死状態にあったなかで、アダムズらとともに何とか立つことのできた5、6名の一人であり、温厚な人柄を買われてアダムズの世話をしよう指示されたのであろう。

リーフデ号の船員のなかには、アダムズやクワケルナックのように望郷の念に焦がれて早くから帰国を希望した者がいた。特に故郷に妻と幼い子どもたちを残してきたアダムズは何度か家康に出国を願い出たが、彼を特別に重用している家康はこれを却下している。それでも家康の晩年には許可されたものの、そのときはアダムズが同国人司令官ジョン・セーリス John Sarisとの確執から帰国を断念している。いずれにしても、1605年ころまでに船員たちの多くは住居を与えられて日本女性と結婚していたことが、次のイエズス会の記録から判明する。

その市内（江戸）と近く（浦賀）に7、8人のイギリス人とオランダ人が住んでいる。彼らは以前にナウ（ナウ船、「リーフデ号」を指す）で来日したのだが、公方が同船を彼らから没収し、関東に廻航させ、彼らはその地の住人としてすでに自宅と家族を擁してい

る<sup>14)</sup>。

サントフォールトの家族構成を示す史料がある。後年「鎖国令」の一環で日本在住の外国人とその家族が国外追放になり、サントフォールト一家と娘夫妻は1639年に日本を離れたが、その出国記録によればサントフォールト夫妻の年齢差は19歳で、夫は70歳、妻は51歳であった<sup>15)</sup>。これから逆算すると、1605年にすでに結婚していたとすれば、夫36歳、妻17歳ということになる。サントフォールトの妻は江戸の大工の娘イサベラIsabella（日本名は不明）で<sup>16)</sup>、洗礼名からキリシタン（カトリック）であったかも知れないが、後年のキリシタン弾圧で被害を受けた形跡はない。「江戸の大工の娘」から想起されるのは、家康に依頼されてアダムズらが2隻の洋式船を建造したエピソードである<sup>17)</sup>。最初の洋式船は1605年までに完成したとみられるので、イサベラの父がこれらの建造に動員され、サントフォールトとの縁が生じたことも考えられる。この船の建造にオランダ人も関わっていたことが、クワケルナックの甥でオランダ東洋遠征艦隊の指揮官マテリーフ・デ・ヨンゲMatelief de Jongeの航海誌に記されている。それによれば、同艦隊が1607年9月7日に東シナ海で日本人海賊に遭遇したとき、彼らから「皇帝のために船を建造したオランダ人がまだ8人ないし10人ほど日本におり、これらの船はまもなくパタニに到着する見込みである」との情報を得ている<sup>18)</sup>。

サントフォールトの人柄については多くの人々が好人物と評しており、それを表すエピソードが日本来航まもない時期にある。それはフランシスコ会修道士ホアン・デ・マドリッドJuan de Madridが、水上を歩く奇蹟を起こしてみせると息巻いた出来事に関連するもので、1604年の浦賀でのこととされる<sup>19)</sup>。リーフデ号が到着したとき、日本に在住していたカトリックの宣教師たちは船員たちを「海賊」と非難し、彼らの処刑さえ求めていた。ところが、家康は逆に彼らを寛大に扱い、特にアダムズを厚遇したことに大きな危機感を抱いた。そこで、修道士ホアンは奇蹟によってカトリックの威力を示し、プロテスタントのイギリス人やオランダ人を自派に改宗させようと図ったのであった。しかし、十字架形の木片を両脚に縛り付けて水上を渡ろうと試みたものの、失敗して溺れかかってしまった。サントフォールトが船に乗ってホアンの後ろについていたので、ホアンは引き上げられて助かった。後日アダムズが様子を見に行くと、ホアンは「あなたが成功するように念じてくれなかったから失敗したのだ」と負け惜しみを言ったという<sup>20)</sup>。

サントフォールトはリーフデ号の船員のなかでクワケルナックとともに初めて日本を出国し、1605年12月2日、すでにオランダ商館が設立されていたマレー半島北部のパタニに到着した<sup>21)</sup>。しかし「1年間一人のオランダ人もやって来ない」<sup>22)</sup> 状況では「オランダ東インド会社パタニ支店」も開店休業状態であったろう。期待した商館の仕事は見つからず、クワケルナックは甥マテリーフの艦隊がマレー半島南部沿岸に集結しているとの情報を得ると、合流するためそこに向かった。一方、サントフォールトは母国への帰国には執着せず、日本に戻る道を選んだ<sup>23)</sup>。このときサントフォールトがいつ日本に戻ったかの正確な記録はないが、1607年

1月付のある書簡に「(戻る決意をしたサントフォールトが)あるいはすでにかの地(日本)に向かったかもしれない」とある<sup>24)</sup>。おそらく1606年の内には現地を離れたであろう。

いったん日本に帰ったサントフォールトだが、すぐ再度パタニに渡航したようで、これは「(建造船が)まもなくパタニに到着する見込み」という先の日本人海賊の証言と一致する。ほぼ1年後の1608年2月、サントフォールトはシャム駐在のオランダ人商務員ランベルト・ヘイン Lambert Jacopssen Heyn とパタニを出航し、シャム Chiam 経由で日本に向かっている<sup>25)</sup>。その際サントフォールトはパタニのオランダ人に対し、アダムズが皇帝から大変な厚遇を受けていることを伝えている。

この二度目の日本帰国に伴って、サントフォールトはヘインを通じて「オランダ国王マウリッツ Maurits」(実際は公爵で総督)の名で日本皇帝に謹呈する親書を託された。その要旨は、日本皇帝がオランダとの通商を許可する決定を行ったことには感謝するが、現在オランダ艦隊はポルトガルとの激しい戦闘で甚だしく困難な状況にあるため、日本訪問はすぐには不可能なことを理解願いたい、というものである。また、サントフォールトは東インド会社の要請により、皇帝を表敬する際の贈呈品の選定を任された。当時のパタニにはそれに相応しい上等な国産品がなかったので、限られた範囲で「お近づきの品」を選ぶ必要があり、大鉢、皿、黒羅紗、コップなどが箱詰にされた<sup>26)</sup>。

翌1609年7月1日には最初のオランダ東インド会社船2隻が来日し、夕刻平戸に着岸した。これら2隻は元々1607年12月にオランダを出航した13隻編成の船隊に属するもので、提督ピーテル・フェルーフ Pieter Wilemsz Verhoeff が指揮していた。来日した船の名はロート・レーウ・メット・ペイレ (当時のネーデルラント連邦共和国の紋章「矢を持つ赤いライオン」の意、400トン) 号とグリフィユン (鷲とライオンの合成獣「グリフィン」の意、80トン) 号で、マレー半島南端のジョホールで本隊と離れ、いったんパタニに寄港して多少の生糸と胡椒と鉛を積み込んでから日本に向かった。

実は両船はマカオから日本に向かう大型ポルトガル船があるとの情報を得ており、その船を襲撃して略奪した品を日本で売却するつもりであった。パタニで積荷を行ったのはポルトガル船と遭遇できなかった場合を考えてのことで、海賊ではなく貿易商人であることを偽装するためのものだったが、結局「獲物」は見つからず、両船はそのまま日本にやってくるようになった<sup>27)</sup>。当時、オランダやイギリスの東洋遠征隊はなお私掠船の性格を帯びており、のちにポルトガル人たちは將軍秀忠にオランダ人の海賊行為を取り締まるように要請している。やがてオランダ船はジャワ島方面で支配権を争っていたイギリス船さえも襲撃するようになり、このことは日本においても両国の関係を悪化させた<sup>28)</sup>。

異国船来航の知らせを受けたサントフォールトは、直ちに長崎の役人を伴って一行に面会し、通訳を務めた。7月7日、サントフォールトは通商を求めるため皇帝との謁見を希望しているオランダ人らに対し、交渉を成功させるのに相応しい献上品について再度アドバイスし、生糸、鉛、黄金のコップ(計240グルデン相当)が選ばれた。また、オランダ人たちは日本の



事情に通じていて日本語にも熟達しているサントフォールトに、参府に同行するよう要請している<sup>29)</sup>。

オランダ人参府団は上級商務員のアブラハム・ファン・デン・ブルーク Abraham van den Broek とニコラス・ポイク Nicholas Puyk に、二人の随員と通訳のサントフォールトで生まれ、通商協定の締結を目指して7月27日に平戸を出発した<sup>30)</sup>。彼らは8月13日に駿府に到着し、すぐに家康との謁見を許された。その結果、オランダ船は日本のどこにも出入り可能で、あらゆるところで自由に貿易ができ、家も建てられ、日本人と同等の保護を受けられるなど、きわめて満足度の高い通商協定を結ぶことができた。大きな成果を得た一行は9月13日に平戸に戻った<sup>31)</sup>。

この参府記には注目すべき内容がいくつか含まれている。第一に、ポイクらはこの旅の途上、大坂でヨーステンら二人、白須賀（現愛知県湖西市）で二人、駿府で二人の、計6人のオランダ人と会っていることで、いずれも名前が判明している。同行したサントフォールト、それに帰路に会ったアダムズを含めてそこにはリーフデ号の船員の名が8名挙げられ、浦賀にもなお数人のオランダ人が住んでいるという。これは上述の「12人が生存している」という1605年の証言とほぼ一致し、元リーフデ号船員のほとんどが4年後もなお存命であったことがわかる。第二に、ポイクらは日本在住のオランダ人たちに渡航費用無料で帰国の斡旋をしようと申し出たが、みなそれを断っていることである。日本に来て10年近く経過し、すっかり日本社会に定着した彼らは帰国よりも現在の生活を選んだようだ。第三に、一行の要求は家康から意外にあっさり了承され、すぐに平戸にオランダ商館が設立される運びになった。

この間、サントフォールトは帰路の室津（現兵庫県たつの市）で所用のため一行から離れた<sup>32)</sup>、通訳や仲介者として使節の期待に違わぬ活躍をしたであろう。このため、長崎出航を前にした9月20日、オランダ人たちは船上会議において「到着以来ほとんど2ヶ月間、当所と皇帝の下で通訳やその他諸般の労を取ってくれた」サントフォールトに対し、ひと月50グルデンで2ヶ月分の報酬を与えることを決定した<sup>33)</sup>。また、同じ会議で所期の目的である商館の設立と、ジャックス・スペックス Jacques Speckx ら4名が日本に駐在することが決定された。両船は10月2日に日本を去り、同30日にパタニに到着した。ロード・レーウ・メット・ペイレン号は翌1610年7月20日に9227個の陶磁器と漆塗り木箱9箱を積載してオランダ・テクセルに帰還し、日本から直接商品を輸入した同国最初の船となった<sup>34)</sup>。

### 3 オランダ・イギリス両商館との関わり

サントフォールトは翌1611年にも、駿河に参府するスペックスとセヘルズゾーン Pieter Segertszoon に大坂で会い、またも彼らを手助けしたが、このときは参府に同行しなかった<sup>35)</sup>。おそらく堺に住みながらビジネスに励んでいたのであろうが、温厚で堅実な性格と思われるサントフォールトも時に交易地で危険を伴う取引に手を染めたことがあったようだ。それ

を示す次の例は、ヨーステンのやり口に乘せられた結果であろう。ヨーステンは強引な手法や多額の借金によってしばしば周囲の者の信頼を失っているからである。パタニのイギリス商館事務員アダム・デントン Adam Denton は1614年10月5日付で東インド会社に次のように書き送っている。

（前年1613年4月末日に）当地で日本のジャンク船2隻が強引に通商した。許可なく城壁内に入るのは禁止されているが、禁を破ったのでいずれも日本人の8人が殺された。1隻はジョン・ヨーソン（ヤン・ヨーステン）という者が船長で、他の1隻の商人はメルチョール・ファン・サントフォルト（メルヒオール・ファン・サントフォールト）である。両人は棒銀とともに樟脳と若干の箱をもたらしたが、私は1斤15リアルもする人参根のことを聞いた。彼らは当地でもう1隻のジャンク船を購入し、多くの毛皮や蘇木を積み込んだ<sup>36)</sup>。

この文章だけでは詳細がわからないが、多くの日本人が犠牲になっていることから、二人のオランダ人にもかなりの危険が及んだことであろう。サントフォールトがこの危険な取引から帰国したちょうどそのころ、オランダに遅れること4年、イギリスも平戸に商館を開設し、商館長にはリチャード・コックス Richard Cocks が就任した。この時期のサントフォールトの消息は丹念に書かれたコックスの日記、およびイギリス船クローブ号の司令官で、当時開設されたばかりのイギリス商館に滞在していたジョン・セーリスの次の記述が明らかにしてくれる。

1613年7月11日メルセル・ファン・ヨンフォールド（メルヒオール・ファン・サントフォールト）というオランダ人が来訪した。今回はシャムから来て、（シャム在住のイギリス人事務員）ルーカス・アントニソン Lucas Antonison (Antheunissoon) からアダムズ氏へ宛てた手紙を持参し、彼自身は堺にある自宅に戻るので、私に託した。彼は同地で結婚している。私は彼が大変落ち着いた人間で、言語も商売もなかなか素晴らしいので、彼を厚遇しよう、もし望むならイギリスに連れて行こうと言ってみたが、彼は断った。今の生活が自国にいるより満足だと思って、それに執着している。

1613年7月12日メルセルが来訪し、各方面の貿易の様子についてよい注意をしてくれた。大儲けする方法はあるが、ポルトガル人やスペイン人、オランダ人がパタニで一切の品を望むだけ毎年仕入れ、他の国の者は彼らの商品をマカオやフィリピンで仕入れるように、シナやシャムで後を続けなければならない、という。…彼がよい勧告をしてくれたので、彼の出発の際にキャラコを3反、彼の子に1反を与えた<sup>37)</sup>。

この文章でセーリスはサントフォールトを高く評価する一方、ヨーステンを「卑劣な輩であると聞いている」と酷評している。これは両者に対する何人かの人物評と一致する。また、帰

国したサントフォールトが平戸から妻子の待つ堺に急いでいることがわかる。サントフォールトが堺に移り住んだ時期はわからないが、上述の、4年前にポイクらの使節団に同行したとき、帰路「所用で」大坂に近い室津で別れているのは何らかの関連を思わせる。大人口を抱えた大坂や堺をベースに、平戸や江戸との連絡を生かした商売をしていたのであろう。なお、オランダ人商務員補のエルベルト・ワウテルセン Elbert Woutersen もこのころ大坂で定宿に居住しながら商務に携わっている。サントフォールトはしばらくオランダ・イギリスの両商館と密接な関係を保っていたが、前述のようにセーリスの勧誘にも応ずることなく独立して仕事をした。本国への帰国を断っているのも他の元船員たちと共通している。なお、友人ヨーステンは1615年夏、来日した弟と長崎で会ってコックスらと会食しているが<sup>38)</sup>、サントフォールトにもアドリアン Adrian という弟がおり、1614年4月に東インド会社ゼーラント支部にインドへの航行を要請している<sup>39)</sup>。しかし、兄弟が東アジアのどこかで会ったり、弟が来日したりした形跡はない。

同じ1613年11月9日、セーリスはシャムに渡るサントフォールトに託して前述の駐在員アントニソンにビジネス関連の書簡を送った<sup>40)</sup>。これを受けて、サントフォールトは翌14年7月にヤン・ヨーステンらと日本に戻ったときイギリス商館の保証人になっている。商館長コックスは江戸のウィッカムに次のように書き送っている。

1614年7月25日ジョン・ヨーセン（ヤン・ヨーステン）がメルカール（メルシオール）氏およびウィリアム氏とともにシャムから帰ってきた。ルーカス・アンテニウス（アントニソン）氏は私に同日付で同趣旨のユーモラスな手紙を2通書いてきたが、ジョン・ヨーセンに託して当地の「第七航海事業」で使うため748テールあまりを私に支払ってきた。メルチャール・サントフォルド（メルヒオール・サントフォールト）がその支払いの保証人である。

しかし私はイギリス人のだれからも保証書を得ていない。彼と一緒に現地にいるのは老いた外科医と読み書きのできない船員のみで、同国で物品を売るために滞在しているイギリス人がいるものの、今彼の所にやってくることはできない。それは彼が滞在している場所とルーカス・アンテニウスがいる地の間で戦争が起きているからである。私はわが商会にイギリス人が仕えてくれることを望む。というのはオランダ商館員らがいろいろ不都合を生じさせるのではないかと恐れるからである<sup>41)</sup>。

このように、イギリス商館開設から1年を経ているが、コックスのオランダ人との距離感はいかにも微妙である。連携を図りながらもどこか信用しきれず、不安を抱いている様子が看取できる。

一方、堺に戻ったサントフォールトは、その年の末、大坂冬の陣直前の不穏な情勢を、平戸の商館長スペックスに知らせている。



1614年12月29日貴氏がヨーステンと九郎兵衛（定宿の主人）殿に宛てた手紙は受け取りました。けれども今は大戦の風説のため、彼らに届けることはできません。皇帝は全軍を率いて大坂の前までやって来て包囲しているので、だれも出入りできないのです。貴氏は皮革製品の残部の売却を命じていますが、みな自分の身と財産を守ることに懸命で、商売どころではありません。全能の神がわれらをうまく逃してくれますように。…皇帝が全軍を率いて伏見付近に陣営を敷き、大坂を囲もうとしているので、堺市民は大いに心配しています。大坂も皇帝軍を迎え撃つ準備しているので、大坂や堺の市民は財産を持ってあちこちに四散しています<sup>42)</sup>。

この大坂冬の陣の緊張と混乱を何とか乗り切ったサントフォールトであるが、半年も経たないうちにまた大きな戦乱の噂が立った。大坂夏の陣である。このときサントフォールトは近くにいるワウテルセンからオランダ商館長スペックスへの現金の輸送を依頼された。ワウテルセンはスペックスに宛てて次のように書いている。

1615年5月1日助左衛門殿が貴氏に負っている6貫880匁を彼より受け取りましたので、サントフォールトに託して貴氏に送ろうとしましたが、彼は旅の途上に待ち伏せする日本人盗人のことを恐れ、これを断りました。疑われないようにこの金を米に紛れ込ませて送ればよい、と提案しましたが、彼は同意しませんので、我慢するしかありません。サントフォールトが下（しも＝九州）へ赴く理由は当地に再度大きな噂があり、皇帝が大坂の秀頼を包囲し、堺を焼くかもしれないからです。長崎には食料品一切があるし、外国人に慣れているので、始終子どもたちにつきまといわれ、注目されて囚人のような生活を送らなくて済むからでもあります<sup>43)</sup>。

この内容から、サントフォールトは危険の迫った堺から長崎への転居を決めたことがわかる。流民の発生も予期しており、そうした状況で大金を所持しながら移動する危険を冒していないのは慎重な性格の表れである。また、長崎の生活が安定していることに加え、外国人が珍しがられないことも転居の利点にあげている。堺では行く先々で好奇の目に晒されたようだ。なお堺はこの直後、徳川方ではなく豊臣方浪人衆の焼き討ちに会い、全市が灰燼に帰している。

長崎に移ったサントフォールトは、その年（1615年）の後半にイギリス商館長コックスと頻繁に商売上のやり取りをしている。イギリス商館はオランダ商館と同じく、アダムズやヨーステン、サントフォールトラ、リーフデ号の元船員の助力をかなり受けて運営されていた。この年のコックスの日記にサントフォールトの名が頻繁に挙げられているのは、両者の親しい間柄をうかがわせる。コックスはサントフォールトにオランダ年代記の本を貸したりし、また何度か手紙をやりとりする際、チーズを添えたりしている。7月上旬、コックスはアダムズを通じてある日本人がジャンク船の売却を希望している話をサントフォールトから持ち込まれた

が、これには乗らなかった。次いで9月上旬、イギリス商館開設後のイギリス船として初めて来日したホジアンダー号が平戸に入港し、その整備のため8000本の鉄釘が必要となると、コックスはその手配をサントフォールトに依頼している<sup>44)</sup>。

#### 4 宗教弾圧と日本出国

コックスの日記は1615年6月から記され、1619年と20年の大部分は欠損しているものの、商館閉鎖前年の1622年3月まで綴られている。しかし奇妙にも、1616年以降はサントフォールトについての言及がまったく途絶える。そればかりか、コックス以外のイギリス・オランダ関係の史料にもその後およそ10年間はサントフォールトが登場せず、言わば「空白の10年間」となっている。これはどういうことであろうか。

1616年に家康が死去し、秀忠の実質統治時代になると、前代とは異なってイギリス・オランダ両国人に対する扱いもかなり冷淡なものになったが、それは特にサントフォールトに限ったことではない。また、この時期から両商館の関係にも徐々に軋轢が生じたことは、イギリス人に対する冷淡な扱いに怒ったコックスがヨーステンを何度か非難していることからわかる<sup>45)</sup>。しかし、コックスや他の外国人がサントフォールトを悪し様に述べている箇所はない。一方、このころヨーステンは苦勞しながら毎年のように朱印状の発行を申請し、頻繁に東南アジアと交易しているが、幕府との直接的なつながりを欠くサントフォールトが朱印状を入手したことはない。結局、サントフォールトは当時長崎に何人かいた「自由市民」として商館とはほとんど無関係に活動する道を選んだと推定される。ただ、この自由市民が商館関係者にすこぶる評判が悪かったことは商館長（任1623-33）コルネリス・ファン・ナイエンローデ *Corneilis van Nijenwrode* の記録からも明らかである。

自由市民たちはあらゆる問題を引き起こす。バタヴィアの住民でデンマーク人のミッセル・ヴィエール *Michiell Vijheer* という者は、あたかも金製品のように金メッキをした銅のメダルを売り歩き、そのため大変なトラブルが起きている<sup>46)</sup>。

もっとも、私的取引を厳禁されている商館員たちも、時に交易先などで入手した陶磁器や小間物を秘かに売りさばいていたという<sup>47)</sup>。ただ、同じ自由市民でもサントフォールトが非難を浴びる商売に手を染めていた様子はない。扱った商品や取引相手についての具体的な史料もないが、オランダ人やイギリス人に限らず、日本人、中国人、ポルトガル人やスペイン人とも取引したであろう。オランダ人と敵対していたポルトガル人も、後述のようにマカオでの重要事件に絡んでサントフォールトに手紙を託している例があり、両者の信頼関係をうかがわせる。

この史料的空白期間にサントフォールトを取り巻く環境は大きく変化した。リーフデ号の到着以来同志であったアダムズは1620年に、ヨーステンは22年に死去し、23年にはイギリス商

館も閉鎖された。こうしたなかで、サントフォールトは終生の親友となる自由市民フィセント・ロメインVicent Romeijnやマルクス・シモンソンMarkus Symonsonらと連携する。ロメインはかつて太平洋航路でガレオン貿易に従事していて、マニラからマカオを経て来日し、オランダ商館長レオナルド・カムプスLeonard Camps（任1621-23）に出納係として雇用されていたが、同館長が在任のまま1623年秋に急死すると、まもなく自由市民として活動し始めたと思われる<sup>48)</sup>。

次にサントフォールトが史料に現れるのは、1627年にオランダ人聖職者ライエル・ハイスベルツReyer Gysbertszや、オランダ商館員クーンラート・クラメルCoenraedt Cramerが記したキリスト教弾圧に関する行である。これらから苛酷なキリシタン弾圧がサントフォールトの身にまで及んでいたことがわかるが、サントフォールト自身やその妻が直接尋問を受けたり連行された様子はない。そこには次のような要旨の記述がある。

1627年12月末日サントフォールトからの手紙で、有馬に送られた非棄教者348人のうち、最後の3人が坐ったまま失神して死んだことを知った。

1629年8月サントフォールトの良き友人である未亡人のキリシタン婦人とその息子が、長崎奉行采女正（竹中重義）の恐るべき暴虐によって棄教した事例に言及しつつ、このときサントフォールトとロメインはオランダ人であることを証明して無事に済んだ<sup>49)</sup>。

1630年3月1日サントフォールトの住んでいる町の奥でカトリックの宣教師が捕らえられ、その宿主、近所五軒の家族全員も捕らえられて大村の牢獄に連行された<sup>50)</sup>。

サントフォールトは1630年に60歳を超えたが、このころの彼に関する記事にはビジネスに関連したものがないので、第一線からは退いていたとみられる。一方、サントフォールトの人柄を讃えたり、人々の良き相談役として信頼されていたことを示す記録は多い。例えば、オランダ総督の権威を探るため「平戸侯がサントフォールトやその友人たちから聞き込みをしている」という記述は、日蘭貿易が事実上「バタヴィア総督」の管轄であるのに、「オランダ総督」の名で行われている現状に幕府が疑念を抱き、松浦氏を通じてサントフォールトに事実関係を確認したことを意味している。藩主がなおサントフォールトに信頼を置いていることの表れである。また、当時のオランダ商館商務員ピーテル・ムイゼルPieter Muizerも「サントフォールトが長崎のわれわれを訪ねてきた。彼は人柄が良いため、この土地で皆から非常に愛されている」と記しているし、上のクラメルも「サントフォールトやロメインなど信頼できる友人たちから長崎で語られている話（タイオワン事件）を聞いた」と述懐している<sup>51)</sup>。

また、翌31年に商館長ナイエンローデが商務員ウィレム・ヤンセンWilem Jansenに宛てた何通かの書簡もサントフォールトに言及され、商館員の寝台探しを親身になって手伝ったこと、マカオのポルトガル人が（撃沈したオランダ船アウデ・ケルク号の生き残り船員釈放に関して）秘かにサントフォールトに託した手紙を、さらにヤンセンに渡したことなどが述べられている

る<sup>52)</sup>。こうしてサントフォールトは、一段と厳しさを増した1630年代の日蘭貿易に従事するオランダ商館員にとって「古き良き時代」の象徴となった。このころ何度か日本に滞在した同商務員ヘンドリック・ハーヘナールHendrick Hagenauerは、1637年3月に提出した「日本貿易に関する報告書」で以下のような趣旨の報告をしている。

かつてヤン・ヨーステンや長崎の老サントフォールトラオランダ人の先達が言ったように、昔の皇帝（家康）の時代にはわれわれオランダ人と皇帝はきわめて親密であったが…今や將軍の家臣にさえ直接言上することが叶わぬようになってしまった<sup>53)</sup>。

さらに、翌1638年の記録には、インドシナの東京（トンキン）との貿易に赴いたヤハト船がサントフォールト号と名付けられ、同船の航海は「サントフォールト号航海記」として著されたり、東京付近の砂州で同船が座礁に遭うと、その砂州が「サントフォールトの砂州」と呼ばれるなどしたことが記されている<sup>54)</sup>。このようにサントフォールトの厚い人望を示す例には事欠かないが、島原の乱以後、長老格として一目置かれてきたサントフォールトにもいっそう幕府の圧力が強まった。1639年、鎖国令の一環で、西洋人と結婚した日本人女性とその子女らは海外追放とされ、サントフォールト夫妻と娘一家、親友ロメイン夫妻らも、オランダ東インド総督府のあるバタヴィアへの移住を余儀なくされる。彼ら国外追放者一行は1639年10月31日、オランダ船ブレダ号で長崎を出航した。同船には切々たる望郷の思いを着物に書き付けたといわれる「ジャガタラお春」も「エゲレス」（イギリス人）の子として乗り込んでいる<sup>55)</sup>。

一行は11月11日に台湾に到着し、そこに1ヶ月間滞在した<sup>56)</sup>。その間、サントフォールト夫妻はカルヴァン派プロテスタントの牧師ヘラルジュス・レビウスGerardus Leuiusの司式で改めてキリスト教の結婚式を挙げている<sup>57)</sup>。彼らは台湾を12月12日に出発し、バタヴィアには1640年1月1日に到着した。1週間後、バタヴィア総督府はサントフォールトが平戸商館に託した資産を現地通貨で補償する決定を下しているし、同年3月と6月の現地『教会員帳』には夫妻と娘スザンナが署名している<sup>58)</sup>。バタヴィア到着時に70歳となっていたサントフォールトは当時としてはかなり長生きしたが、晩年の宗教弾圧や国外追放に伴う心労に加え、年齢的に現地の気候に順応する難しさもあったであろう。サントフォールトはバタヴィア到着の翌年に、ロメインも翌々年に死亡した。

## 5 二人の娘とその夫たち

先述のように、サントフォールトの妻は19歳年下の日本人イサベラで、夫妻には二人の娘イサベラ（母と同名）とスザンナSuzannaがいたが、娘たちはいずれもオランダ商館員と結婚した。イサベラの夫はピーテル・ファン・サンテンPieter van Santen、スザンナの夫はウィレ

ム・フルステーヘン Wilem Verstehen で、娘婿たちはともに後年オランダ商館長（サンテンは代理）を一期務めている。なお、先述のようにセーリスは1613年7月に「サントフォールトの子にキャラコをあげた」としているが、このときの「子」の名前や性別、年齢はわからない。夫妻らはそれから26年後の1639年に日本を出国しているので、その「子」が存命ならば当時30歳前後になっていた筈であるが、出国時にそれらしい名はない。わずかな例外となるアダムズやヨーステンの子を除いて、ほとんどの混血の子たちは国外に追放されたので、その「子」は仕事や結婚ですでに外国で生活していたか、あるいは早世したのだろう。

サントフォールトの娘婿となったサンテンの名は、1627年10月にオランダ商館事務員ムイゼルが記した会議録に現れているので、このころ来日したと思われる<sup>59)</sup>。サンテンはまた、1623年のイギリス人や日本人に対する虐殺事件で有名なアンボイナについて「当時アンボイナの城砦には日本人10名がいた。アンボイナの町中にも日本人が多数いた。」と報告している<sup>60)</sup>。ただ、若きゆえの放縦ぶりも目立ち、商館長ナイエンローデのサンテン評は厳しく「日暮れに二人の湯女を連れて宴会から帰ってきた」、「恥知らずで無学で大嘘つき」、「金のことを大変誇張して話すので彼の要求額は送れない」などと記している<sup>61)</sup>。とりわけ女性関係の乱脈さが目立ち、複数の愛人を抱えながら彼女らとの間にもうけた子を養うのに苦勞していた。1633年5月末日付でバタヴィア総督府が平戸のオランダ商館に与えた訓令には次のようにある。

われわれは前記のファン・サンテンがすでに日本に二人の子、すなわち江戸に一人、平戸に一人の子を儲けていることを知っており……彼自身もこれほどあちこちの土地で二人の妾と子どもたちを養わなければならぬという出費の多い生活に落ち込んでいるから<sup>62)</sup>。

こうした私生活ではあったが、1633年には平戸の商館長代理を半年ほど務め、江戸にも参府している。サンテンは34年に離日してバタヴィアに戻ったのち、同年末、いったんオランダに帰国した。上述の1640年の元日にバタヴィアに到着したブレダ号の乗員名簿に「ヴィクトル・ファン・サンテン Victor van Santen」の名があり、歴史家ムルデルはこれをサンテンの息子としている<sup>63)</sup>。この息子のその後はわからないが、当時のバタヴィアの婚姻名簿に1650年12月11日付で「ピーテル・ファン・サンテンの寡婦コロマンデル海岸のアンナがバタヴィア城門衛と結婚した」<sup>64)</sup>との記録がある。この「ピーテル」が「ヴィクトル」とすれば、サンテンの息子は南インド出身の女性と結婚したが若くして亡くなったことになる。また、サンテンが妻イサベラとの間に儲けた娘マリヤはオランダ人司法官ニコラス・フェルブルフ Nicolaes Verburg と結婚し、父のサンテンとの連名で1660年と62年に遺言状を作成している<sup>65)</sup>。ただし、ここに妻イサベラの名はないので、すでに死去していたのであろう。

サンテンの離日と入れ替わるように、次女スザンナは1634年に商館員ウィレム・フルステーヘンと結婚した。スザンナは1639年の日本出国時に16歳で、2歳の次男ヘラルト Geraardt を連れていた。このとき同行しなかった長男メルヒオール（祖父と同名）もいたので、結婚時は



わずか12歳、14歳にして二人の男児の母となった。夫ウィレムは1610年ころオランダ南部のフリッシゲンに生まれ、出国時の年齢は29歳であった。1629年から平戸オランダ商館に勤務して34年に長崎に移住したが、このときおそらく義父の友人ロメインから日本東方の太平洋上にあるという「金銀島」の話を聞き、バタヴィア総督府にこの伝説の島への探検隊派遣を提言した。その探検計画はまもなく二度実行されているが、来日して同様の探検を試みたスペイン人セバスチャン・ビスカイノ Sebastian Vizcaino らと同じ情報源であろう<sup>66)</sup>。

バタヴィア到着後、フルステーヘンは現地法務委員会書記に任命されたが、その後再び日本に戻り、1646年10月28日から1年間出島のオランダ商館長を務めた。商館が出島に移って5年後のことであり、在任中に江戸参府を行って将軍徳川家光と、御曹司の家綱に謁見した。その際、ラクダ2頭、麝香ネコ、ヒクイドリ、オウム2羽、薬品、万華鏡などを献上したことが「参府記」に記されている<sup>67)</sup>。一方、妻サザナは夫ウィレムが日本に赴任している時期に、ロメインの妻（長崎のイザベラ）からの遺言によって多くの物品を遺贈されている。1647年11月に作成されたその遺言状には「当地の市民であった故メルヒオール・ファン・サントフォールの寡婦イサベラ・ファン・サントフォールト夫人には現金300レアルと革張りの空き箱1個(を遺贈する)」とあるので、サントフォールト夫人イサベラはこのときまだ存命であり、両家族がなお非常に親しい間柄であったことがわかる<sup>68)</sup>。

フルステーヘンは1647年11月、出島のオランダ商館長職を離任してバタヴィアに戻ると東インド評議会会員外参事に就任し、50年には下級裁判所長を務めた。財務官に昇進した翌51年には台湾のゼーランディア城、インドシナの東京やクイナム（広南）に使節として派遣された。52年にバタヴィアの法務委員に任命されたが、同年10月にオランダに帰国した。その後再びインド西北部のスラートに赴任したが、現地での戦いに加わったことにより1659年10月に戦死したという。バタヴィア、平戸、長崎、東京、ゼーランディア、スラートなど東南アジア一帯で広範囲に活動した生涯であった<sup>69)</sup>。

以上のように、アダムズやヨーステンの2倍近くを日本で過ごしたサントフォールトは、野心とも派手さとも無縁ながら人々から信頼され、着実に日本社会に溶け込んだばかりか、子の代になっても日蘭交流に貢献した。西洋諸国が世界に雄飛した大航海時代、さまざまな出身国からさまざまな異国に辿り着き、運命を甘受してこうした生き方を選んだ船員たちも多かったのだろう。サントフォールトはその確かな一例である。

## 注

文献『大日本史料』は東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、1969-70年版[1902-4]を使用した。また[ ]内は原著出版年である。

1) アダムズ「未知の友人および同胞への手紙」Rundall, Thomas(ed.), *Memorials of the Empire of Japan in the XVI and XVII Centuries*, New York, 1963[1850], p. 23。

2) オランダの歴史家ウィーデルはこの18人の名を特定している（うち4人は推定）。

- Wieder, Frederik Caspar, *Het eerste Hollandsche schip in Japan, De Reis van Mahu en de Cordes 1598-1600*, 3de d. M., Nijhoff, 1925, p. 21.
- 3) 岩生成一「蘭文史料から見た三浦按針とその家族」(日蘭学会編『日蘭学会創立十周年記念誌』所収, 日蘭学会, 1985年, 9頁。Charles R. Boxer, *Christian Centuries in Japan 1549-1650*, Los Angeles, 1951, p. 286。
- 4) 『大日本史料 第十二編之四』443頁。
- 5) P. G. ロジャーズ(幸田礼雅訳)『初めて日本に来たイギリス人』新評論, 1993年, 64頁。
- 6) 牧野正『青い目のサムライ三浦按針』, 黒船出版社, 1980年, 18頁。
- 7) ただし, 長崎にあったとされるヨーステンの知行地については不明点が多い。
- 8) 渡海朱印状は松浦法印名で発行された(『大日本史料 第十二編之三』161頁)。翌年クワケルナックの名でも発行されており(『大日本史料 第十二編之四』437-8頁), これは来航許可証と考えられるが, その時点でクワケルナックはすでに死亡していた。
- 9) この戦いの経過はBorschberg, Peter, *The Singapore and Melaka Straits: Violence, Security and Diplomacy in the 17th century*, Singapore, 2010. pp. 158-164に詳しい。
- 10) 例えば, Barreveld, Dirk Jan, *The Dutch Discovery of Japan: The True Story Behind James Clavell's Famous Novel SHOGUN*, Lincoln NE., 2001. Mulder, W. Z., *Hollanders in Hirado 1597-1641*, Haarlem, 1985. Massarella, Derek, *A World elsewhere: Europe's Encounter with Japan in the Sixteenth and Seventeenth Century*. New Haven, 1990. Farrington, Anthony, *The English Factory in Japan 1613-1623*, 2 vols., London, 1991. などが参考になる。
- 11) 上掲2) Wieder III, p. 33。
- 12) 上掲1) Rundall, p. 24。
- 13) Corr, William, *Adams the Pilot: The Life and Times of Captain William Adams*, New York, 1995, pp. 38-9. クラウス・モンク・プロム(下宮忠雄訳)『按針と家康』出帆新社, 2006年, 64頁。
- 14) フェルナン・ゲレイロ編(岡村多希子訳)「1605年の日本の諸事」, 松田毅一編『十六・七世紀イエズス会日本報告集第I期第5巻』同朋舎出版, 1988年, 28頁。
- 15) 上掲10) Mulder, p. 257。
- 16) Leupp, Gary P., *International intimacy in Japan: western men and Japanese women 1543-1900*, London, 2003, p. 55。
- 17) 日本側の史料として「慶長見聞記」(『日本庶民生活史料集成第八巻見聞記』三一書房, 1969年所収)があり「伊豆国伊東で建造した」としている。同書621頁。
- 18) Boxer, Charles R., *Portuguese Merchants and Missionaries in Feudal Japan 1543-1640*, London, 1986, I-p. 33. 『大日本史料 第十二編之六』491頁。
- 19) 上掲10) Farrington, p. 266, n. 4。
- 20) 上掲10) Farrington, p. 264. 「1614年12月10日付, 平戸のコックスからロンドンのトマス・ウィルソン Thomas Wilson 宛書簡」, 岡田章雄『三浦按針』(岡田章雄著作集V) 思文閣出版, 1984年, 52-4頁。上掲3) Boxer, pp. 236-7。
- 21) 「1608年2月6日付, パタニ・オランダ商館のヴィクトル・スプリンケル Victor Sprinckel からアダムズへの書簡」, Purnell, C. J., *The Log-book of William Adams 1641-1619 and related documents*, London, 1915, p. 84 (270), 上掲20) 岡田章雄, 75頁。
- 22) 『大日本史料 第十二編之四』440頁。1611年10月22日付アダムズの手紙。
- 23) 上掲21), Purnell, p. 85(271)。「スプリンケルの書簡」。
- 24) 『大日本史料 第十二編之四』442-3頁。ジャック・レルミテ・デ・ヨンゲ Jacques l'Ermite de Jongeの父宛書簡。
- 25) 上掲21) Purnell, p. 84, n. 3でパーネルは「シャム Chiam」ではなく「チャムパー Chiampa」かとしている。
- 26) 『大日本史料 第十二編之六』495-9頁。

- 27) クレインス・フレデリック『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店、2010年、26-7頁。
- 28) 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イギリス商館長日記 付録(上)』東京大学出版会、1981年、29-42頁。
- 29) 『大日本史料 第十二編之六』466頁、469-70頁。
- 30) 『大日本史料 第十二編之六』456頁。
- 31) 金井圓『日蘭交渉史の研究』(思文閣出版、1986年)にこの旅行記の全文訳がある。
- 32) 金井圓、同書109頁。
- 33) 『大日本史料 第十二編之六』481頁。
- 34) オスカー・ナホッド(富永牧太訳)『十七世紀日蘭交渉史』養徳社、1956年、76-7頁。  
Nachod, Oskar, *Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert*, Leipzig, 1897, p. 115.
- 35) 上掲10) Barreveld, p. 230.
- 36) Danvers, Frederik Charles, *Letters Received by the East India Company* vols. I, Amsterdam, 1968, p. 113. 岩生成一訳注『慶元イギリス書簡』雄松堂、1966年(1929年)、270頁。
- 37) Satow, Earnest, *The Voyage of John Saris to Japan 1613*, Bristol, 1998[1900], pp. 102-3.  
村川堅固訳『セーリス日本渡航記ヴィルマン日本滞在記』雄松堂、1970年、139-40頁。
- 38) 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料 イギリス商館長日記 訳文編之上』東京大学出版会、1979年、91頁。
- 39) 上掲2) Wieder, I, p. 91.
- 40) 上掲37) Satow, p. 178, 『セーリス日本渡航記』225頁。
- 41) 上掲36) Danvers, p. 68, 同『慶元イギリス書簡』268頁。
- 42) 『大日本史料 第十二編之十六』44-6頁。
- 43) 『大日本史料 第十二編之二十三』654-5頁。
- 44) 上掲38) 『イギリス商館長日記 訳文編之上』189, 194-5, 202, 206, 211の各頁。
- 45) 上掲38) 同『訳文編之下』381-90頁、および同『付録(上)』29-42頁。
- 46) 上掲10) Mulder, p. 62.
- 47) 上掲10) Mulder, p. 63.
- 48) 上掲10) Mulder, p. 62. なおロメインは「ランスマン」の別名を持ちカトリックであった。
- 49) フランソワ・カロン(幸田成友訳)『日本大王国志』平凡社、1967年、204-5, 208-9頁。
- 50) 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記 第一輯』岩波書店、1969年、328頁。
- 51) これら三つのエピソードは上掲50) 永積訳、126, 127, 363頁参照。
- 52) これら二つのエピソードは上掲50) 永積訳『(同日記) 第二輯』、46, 158頁参照。
- 53) 上掲34) ナホッド、409頁。
- 54) サントフォールト号については上掲50) 永積訳『(同日記) 第四輯』20頁、112-3頁。および東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 訳文編之三(下)』東京大学出版会、1978年、12-150頁は1637年12月から38年8月までの「サントフォールト号の航海記録」で、45頁に「サントフォールトの砂州」について言及されている。
- 55) 上掲10) Mulder, pp. 258-9, および岩生成一『続南洋日本人町の研究』岩波書店、1987年、17-18頁。ただし出国者の年齢は両者で若干異なっている。
- 56) 上掲10) Mulder, p. 136.
- 57) 上掲55) 岩生、294頁。
- 58) 上掲55) 岩生、53-4, 348-9の各頁。
- 59) 上掲50) 永積訳、62頁。サンテンがサントフォールトの娘と結婚したという出所はWikipediaドイツ語版、オランダ語版による(2014年3月18日閲覧)。
- 60) 上掲55) 岩生、259頁(1628年3月9日付)。
- 61) 上掲50) 永積訳、『(同日記) 第一輯』384頁、および『(同日記) 第二輯』337頁。

- 62) 上掲54)『オランダ商館長日記 訳文編之一(上)』232-3頁。
- 63) 上掲10) Mulder, p. 259. なお上掲55)で、岩生はサンテンの息子の洗礼名を「ピーテル」として  
いる(348頁)。この息子が上記62)に述べられた私生児かはわからない。
- 64) 上掲55) 岩生, 358頁。
- 65) 上掲55) 岩生, 179頁。
- 66) この結果1642年に派遣されたブレスケンス号は、翌年盛岡藩山田に漂着した。スペイン側の金  
銀島探検への見解については、ファン・ヒル(平山篤子訳)『イダルゴとサムライ: 16・17世紀の  
イスパニアと日本』法政大学出版会, 2000年[1991], 279-286頁を参照。
- 67) 上掲54)『オランダ商館長日記 訳文編之十』52-158頁に参府の全行程が述べられている。
- 68) 上掲55) 岩生, 209頁。
- 69) 上掲54)『オランダ商館長日記 訳文編之十』1頁, 『同: 訳文編之四』321頁。

## Melchior van Santvoort

Yoshikazu MORI

### Abstract

Melchior van Santvoort was one of the surviving crewmembers of the Dutch ship *De Liefde* which arrived in Bungo in 1600. Although he was not a Hatamoto as William Adams, he traded with Dutch and English factories in Hirado and did independent business as a free citizen. He was the longest living survivors of the crewmembers of *De Liefde* and had been staying in Japan almost 40 years, but finally left Japan for Batavia because of the national isolation policy of Japanese government. Almost all of the crewmembers of *De Liefde* had stayed in Japan of their own will and none of them returned to their home country. On this paper I make clear the life of Melchior van Santvoort and examine a way to live of the Dutch crew who embarked on great ventures all over the world in those days.

**Keywords:** Relation between Japan and Holland, early Edo era, De Liefde, Dutch factory in Hirado